

絵画の中 の はきもの

—靴を愛でて—

見一 眞理子

靴の虜になってしまった女性たちを描いた映画が話題になったり、靴には人の心を惹きつける魔力のようなものを感じます。履きやすさや機能性は勿論のこと、その姿を愛でているだけでなんとも幸せな気分させてくれるから不思議です。私が絵のモチーフとして靴を描くのもそのフォルムやマチエールに心地良さを感じているからかも知れません。私の足を包んでくれる皮革についても1頭の大きさや生きてきた痕跡も見知っています。腹子の滑らかな毛並みの靴などは、手に包むとその感触から暖かさや愛おしさまでが伝わってきます。

思い入れのある靴にはそれぞれにストーリーがあり、込める想いやメッセージも靴の数だけ異なります。私の絵に登場する靴は父が作ってくれたものが多く、そんな靴たちと対話をするように描いています。キャンパスの上に靴を描き込んでゆき、位置が収まった瞬間は、新しい靴に足を滑り込ませ、『シュッ』という音とともにフィットした、まさにシンデレラがガラスの靴を履くシーンのような緊張感があります。

私の作品にはいくつかお気に入りのアイテムがあり、特に『赤い靴』はインパクトがあって大好きなひとつです。絵の中にハイヒールを描き込むことで密やかなエロスを匂わせ、職人の靴に込める想いを表現できたらと思っています。そして、一度履いたら死ぬまで踊り続けなくてはならないア

ンデルセンの物語のように、私もずっと絵筆を持って描き続けていくのだという決意表明の意味もあるかもしれません。

また、私の絵のモチーフとして欠かせないアイテムが木型です。美しい靴たちもすべてこのシンプルな原型から産まれてくるのです。無駄なものを削ぎ落とした究極のかたちはアートそのものです。特に一人ひとりの足の特徴に合わせて革を貼付け削った木型はその人の歩いてきた時間までも感じてしまい、否応なしに私の創作意欲を掻き立てます。靴は身体を包み、常に体温を持って呼吸しています。靴を描くことは『人』を描くことなのかなあとと思っています。

最近はずいぶん機能性を求めて低めの靴ばかり履いていた私ですが、先日銀座で開催されていた『ハイヒール展』で出迎えてくれた魅惑的な靴たちを見た瞬間に、私の何かにスイッチが入ったような心地良い衝撃を覚えました。靴音を響かせ颯爽と街を歩きたくなって、久しぶりに父の作ってくれた赤いヒール靴を箱から出してみました。